

YOUNTEERS

2013



UN

Volunteers

inspiration in action

国連ボランティア計画 (UNV) は、ボランティアリズムの地球規模での推進という任務も国連総会から与えられ、ボランティアリズムを通じて世界の平和と開発に貢献する国連機関です。開発途上国における開発支援や紛争地域での緊急援助、その後の平和構築活動などに貢献する意志のある市民を世界中から募り、各国政府や国連機関、NGOなどの要請に応じて「国連ボランティア」として現地に派遣しています。



Contents

■ 国連ユースボランティア・プログラム

- 国連ユースボランティア・プログラム 3
- 国連ユースボランティア・パイロット事業 4

■ 参加者の声

- ウクライナ 7
- サモア 9
- 東ティモール 11
- ベトナム 13
- ルワンダ 15
- フィジー 17
- ボスニア・ヘルツェゴビナ 19
- エチオピア 21



国連ユースボランティア・プログラム

国連ボランティア計画 (UNV) は若者のボランティアリズムの推進を通じて、若者が世界の平和と持続可能な人間開発の実現に参加すること、「若者の声」を世界の開発論議に含めること、若者の社会的、経済的、人間的な潜在能力を可能な限り開花させることを目指しています。

UNV のボランティアリズムを通じた若者に対する取り組みは、1976 年に採択された国連総会決議に基づき開始されました。

UNV は、これまで国連加盟国政府と連携して、国、地域、国際レベルで若者が社会、経済、人間的な潜在能力を開花できる機会として、ボランティア活動を推進する環境づくり（若者のボランティア・プログラムの創設、ボランティア・センターの設立、青少年に対する政策や立法に対する提言等）を支援してきました。

さらに UNV はヨーロッパや米国、日本等の 10 の大学と連携して大学生のボランティア活動を推進し、UNV が運営・管理する「UNV オンライン・ボランティア・サービス」で、インターネットを通じた若者のボランティア活動への参加可能性を拡げました。

2012 年 1 月 25 日、潘基文国連事務総長は、自身の「5 年行動計画」の中で、若者のボランティア活動の重要性について言及し、若者の社会参加、雇用可能性の増進の有効な手段として「国連ユースボランティア・プログラム」の創設を UNV に委ねました。

これを受け UNV はこれまでの若者を対象とした活動を深化・拡充するための、「UNV ユースボランティア戦略 2014-2017」を策定しました。

「戦略」の中心には、コミュニティと同時に、活動と変革の主体としての若者自身を置きました。



「UNV ユースボランティア戦略 2014-2017」では、以下の 3 つの成果を目標としています：

1. 若者のボランティア活動を通じた地球規模の平和と持続可能な人間開発への貢献に関する認知向上と、開発論議への若者の声の反映；
2. 地球規模の平和と持続可能な人間開発のための、地域、国家、コミュニティレベルの若者のボランティア活動を可能にする環境作りを支援する関係者・諸機関の能力を改善すること；
3. 「国連ユースボランティア」のモダリティを通じた地球規模の平和と持続可能な人間開発のための若者の活動の機会をより多様に拡大すること。

（「国連ユースボランティア」モダリティでは若者の年齢の定義を 18~29 歳としました。）

国連ユースボランティア・パイロット事業

● UNV は、2004 年から関西学院大学との連携で「国連学生ボランティア・プログラム」を実施し、世界各地に 67 名の学生ボランティアを派遣しました。



● その実績を踏まえ、2013 年より「国連ユースボランティア・パイロット事業」を 2 年間実施することにしました。同事業を実施するにあたり、外務省から拠出されている UNV の日本信託基金から 2 年間で 60 万米ドルの利用が承認されました。

● 2013 年 3 月 8 日には UNV と関西学院大学との間で基本合意書 (Letter of Intent) が取り交わされ、「国連ユースボランティア・パイロット事業」の実施にむけて双方が協力していくことが合意されました。

● その後、UNV と関西学院大学が「国連ユースボランティア・パイロット事業」の実施に関する覚書 (MOU) に署名しました。同時に関西学院大学は、このパイロット事業に参加する日本国内 5 大学 (明治学院大学、上智大学、明治大学、東洋大学、立教大学) と国連ユースボランティアの派遣に協力する了解事項を取り交わしました。

● 関西学院大学は、これまでの UNV との連携を通じた経験を生かして、同パイロット事業実施の基幹校として、他大学に同事業の参加を呼び掛け、参加 5 大学との連絡、UNV との連絡、参加 5 大学と UNV を交えた「連絡会議」の開催 (4 月から 3 回)、要請案件と候補学生とのマッチングのための連絡調整、「国連ユースボランティア」派遣日本訓練センターの設立 (4 月)、選考された学生ボランティアに対しての事前研修 (8 月 19 ~ 24 日 於東京、9 月 2 日 ~ 7 日 於関西学院大学) を行いました。

2013年 国連ユース・ボランティア・パイロット事業





国連ユースボランティア・パイロット事業

● 12名の国連ボランティアは、2013年9月から2月の約5か月間にわたり、アジア・太平洋州、アフリカを含む12か国、4つの国連機関に派遣されました。

● 2014年3月27日、国連大学にて2013年度「国連ユースボランティア」帰国報告会を実施しました。

2013年国連ユースボランティアの派遣概要

◎ 活動内容：ホームページやポスター作成などの広報活動やプロジェクト運営支援などを通して、教育・保健衛生・環境・ジェンダー・貧困削減など国連ミレニアム開発目標 (MDGs) 達成に貢献すること

を目指す活動を行います。

◎ 派遣期間：約5ヶ月間 (2013年9月から2014年2月)

◎ 派遣者数：国内6大学から合計12名の学生

◎ 派遣国：12か国 (カンボジア、ネパール、バングラディッシュ、東ティモール、ベトナム、ウクライナ、ボスニア・ヘルツェゴビナ、サモア、フィジー、エチオピア、ケニア、ルワンダ)

◎ 配属国連機関：4機関 (UNV 現地事務所、UNDP、UN-Habitat、UN Women)

2013年 国連ユース・ボランティア・パイロット事業

派遣国	派遣機関	タイトル
ウクライナ	UNV	Youth Volunteering Specialist
エチオピア	UNDP	Support to Climate Change Associate
カンボジア	UNV	Youth Volunteering Specialist
ケニア	UN-Habitat	Youth and Governance Specialist
サモア	UNV	Communication Assiastant
ネパール	UNV	Youth Volunteering Coordinator
バングラデシュ	UNV	Knowledge Management and Communication Support
東ティモール	UN Women	Youth and Volunteerism Programme Liaison
フィジー	UNV	Communication and Knowledge Management - UNV
ベトナム	UNV	Youth Volunteering Specialist
ボスニア・ヘルツェゴビナ	UNV	Youth Volunteering Specialist
ルワンダ	UNV	Youth Volunteering and Skills Development Specialist

YOUTH VOLUNTEERS



ウクライナ：呉原郁香さん

ウクライナに派遣された呉原郁香（くれはら・あやか）さんからの現地報告を紹介します。呉原さんは、関西学院大学の総合政策学部4年生で、2013年度国連ユース・ボランティアのYouth Volunteering SpecialistとしてUNDP ウクライナ事務所に派遣されました。



(写真):2013年10月末に行われたHIV/AIDS予防キャンペーンとMDGs教育を目的とした地域三県合同のサッカー大会でプロジェクトメンバーと共に

ウクライナについて

ウクライナは人口4600万人、本土面積はロシアを除くと欧州第1位で、ロシアとEUの間で地政学的に重要な位置を占める大国です。1991年ソ連崩壊に伴い、独立国家ウクライナになりました。公用語はウクライナ語ですが、ウクライナ語のみを話す国民は西部に集中し、その他の地域ではロシア語とウクライナ語の両方を話し、日常生活ではロシア語がより使用されています。2013年後半には、ウクライナ国内で政府の政策に対する大規模なデモが発生し、ソ連時代からのロシアとの関係を好意的にとらえる人々と、欧州連合（EU）との関係を新たに切り開きたいと考える人々の意見の対立が激しくなりました。現在では首都のキエフのみだけではなく、ウクライナ全体で国民の対立が広がり政治、経済で大きな混乱が続いています。

ウクライナでの生活

私は首都キエフから電車で15時間、ウクライナ南部のクリミア半島にある人口約35万人のシンフェ

ロポリという街のUNDPサブオフィスで働いていました。シンフェロポリは黒海に面しており、夏になるとリゾート地には国内外から多くの観光客が訪れます。一方、冬は氷点下20度まで下がり、道路が凍るため、歩くことすらままならない状態です。ウクライナは東ヨーロッパの中進国であり、言語を省けば特に生活面で不便さを感じたことはありません。交通機関や食べ物は非常に安価であり、ソ連時代の建物や文化、習慣が根強く残っているように感じました。またロシアの次に多くウォッカを消費していると言われています。シンフェロポリの多くの人々はロシア語を話し、長身のブロンドヘア、青色の目といったモデルのように容姿の整った人々を多くみかけます。

ウクライナでの活動

UNDP事務所に着任後は、「ミレニアム開発目標のためのスポーツとボランティア活動：若者サッカー・ボランティア（Young Football Volunteers: Sport and Volunteering for MDGs）」というプロジェクト

で、サッカーやボランティア活動を通じて、クリミア自治共和国、ミコライフ州、ヘルソン州の農村地域の若者の健康向上（特にエイズ感染予防）、また若者の市民参加の向上を図りました（詳しくはこちらから）。私の主な業務内容はプロジェクトの（1）広報活動用のニュースレターや英文資料や動画作成、（2）MDGs についてのワークショップの指導ガイドラインの作成、（3）各地域のサッカー大会やワークショップなどの運営企画補佐、（4）各地域で支援した小規模プロジェクトの視察補助など多岐にわたりました。特に、15 ページにもおよぶプロジェクトのニュースレター作成は、はじめから全て任せられました。各イベントで参加者へのインタビューなどを積極的に行い、年間を通じて多く行われるプロジェクトの内容が一目でわかるように工夫しました。その他にも、プロジェクトビデオや英文資料といった情報ツールを作成したことにより、ドナーである他国連機関やパートナーの各政府機関などをはじめ多くの人々に閲覧されプロジェクトの広報活動に役立っていると褒められ、大きな自信に繋がりました。

幸運なことにオフィスでの業務だけではなく、各地域の出張にも多く同行させていただき直接プロジェクト参加者と触れ合う機会に恵まれました。出張先で直接、参加者と携われたことで、プロジェクトの存在意義を深く理解することができ、常に私自身のモチベーションを高く維持することができたと感謝しています。

プロジェクト以外にも UNV の掲げるボランティアリズムのアドボカシー活動を積極的に行いました。現地 NGO が運営する英会話クラブに参加し、毎週

多くの若者に自分自身の国内外でのボランティアやインターン活動経験を共有しました。また現地の大学で学生にボランティア活動の意義について話す機会や、小学生に国際協力について紹介するプレゼンする機会などを頂き、ボランティアリズムについて多くの若者にアプローチすることができました。実際に、私の話を聞いてボランティア活動に興味を持ち、様々な形でボランティアを行うようになった同世代の若者の姿を見て、大きな達成感を感じることができました。

活動を通じて学んだこと、得たこと

国連は各分野のスペシャリストの集まりです。その中で私も多くの意見を求められることがありましたが、自分の知識不足に直面しました。特に派遣国の政治、経済、宗教など最低限の知識がないと、たわいもない話にすらついていくことが困難であり、当初は悔しい思いを何度もしました。友人や同僚の会話についていくために毎日海外の新聞数紙を読み続けました。また派遣中にウクライナ国内で大規模デモが発生したことにより、政治への関心が深まりました。今後は、見聞をより広げ、自分の意見をしっかり持つように心がけたいと思います。

また、このプログラムに参加し「専門の必要性」を強く感じました。必要な言語を必要に応じて使用し、協調性を持ち価値観やバックグラウンドの違う同僚と共に協力し合い、その上で自分の専門知識と経験をフル活用することで、国連組織内でより活躍することができるのだと感じました。国連ユース・ボランティアでの貴重な経験を糧に、今後はより勉学に励み、多くの経験を積み、近い将来必ず国連組織に戻って第一線で活躍します。



サモア：林達也さん

サモアに派遣された林達也（はやし・たつや）さんからの現地報告を紹介します。林さんは、関西学院大学の総合政策学部3年生で、2013年度国連ユース・ボランティアのCommunications AssistantとしてUNDP サモア事務所に派遣されました。



(写真)：同僚と共にUNVのバナーを持って行進

サモアについて

サモアは南太平洋に位置する、人口18万人ほどの小さな島国です。国民のほとんどが敬虔なキリスト教徒で、街のいたるところに大きな教会が建っています。また、国中のいたるところにバナナ、ココナッツ、パンノキやマンゴーの木が生えていて、食べ物に困ることはないようです。むしろ不健康な食習慣が問題になっていて、缶詰、肉類、即席麺が食卓に上ることが多いため、80%以上の人々が肥満とされています。

サモアでの生活

サモアの人々は非常にフレンドリーで明るく、知らない人でもすれ違いざまに「マロ！」とあいさつしてくれます。海は非常にきれいで、特にサヴァイ島のマナセビーチは天国かと思うほど空は美しく、水はどこまでも透き通っていました。サモアは小さな国なのでどこに行っても同僚や知り合いに出会います。それぐらいこの国には食べにいたり遊びに行

ったりするところが少ないのです。週末は安息日のため、開いているお店はほとんどありません。時々退屈することはありますが、サモアではゆっくりのんびり過ごすのがルールなのだと思うことにしています。

近年問題になっているのは野犬です。私が住んでいるアピアを中心に、サモア中で野犬がうろついているため、街を歩くときは昼間でも油断できません。他のインターン達も何人か噛まれたという人がいました。

サモアでの活動

私の主な業務内容は、PCその他周辺機器のトラブルシューティング、セットアップ、ネットワーク管理、ウェブサイト更新などです。サモア人スタッフはPC操作に慣れていない人が多く、小さな問題でもすぐに助けを求められます。PCについてもっと知ってもらうために、ただ問題を直すだけでなく、同時に何が原因だったのかを説明し、快適な使い方

のアドバイスをするように心がけました。またサモアは高温多湿の熱帯気候の国なのですが、この環境のためかよくPCが故障します。毎週のように誰かのPCが完全に故障するなど考えにくいかもしれませんが、サモアでは実際に起こっていました。このように、ICTユニットの仕事は尽きず、忙しい毎日を過ごしています。

昨年12月に開催された、2013年国際ボランティア・デーのイベントでは、企画・広報を担当してもらいました。新聞に広告を載せてはどうかと提案し、自分の作った広告を2日間かなり大きく載せていただきました。イベントではさまざまな国から派遣された複数のボランティア団体と協力して、行進、ブース設営、スポーツイベントを行い、ボランティアリズムの啓発に努めました。普段はPC関係の仕事ばかりしていたので、これがはじめてのUNVらしい仕事といえるものでした。当日会場には120人以上の方々に来てもらい、ボランティア団体同士の交流も盛んになったようで、うれしく思いました。

また、サモア政府が運営するウェブサイトへの助言やビデオ製作にも携わりました。現在サモアは今年9月に開催されるSmall Island Developing States (SIDS) Conferenceという、小島嶼開発途上国約50か国が開発について話し合う一大イベントのホスト国として準備を進めています。私は今回2014年SIDS会議公式ホームページ公開に際して改善すべき点などをアドバイスし、また公式ロゴ発表会のための動画も作成しました。UNとは違い、サモア政府の方たちと仕事することは多少苦勞を感じました。というのも、約束の時間に来てもらえなかったり、メールを無視されたり、いきなり休日に仕事

を頼まれたりと、なかなか思うようにいかないことがあったからです。それでも粘り強く地道に作業を続け、最後にはサモアの総理大臣やメディアに直接私が作ったショートムービーを披露する機会にも恵まれました。

活動を通じて学んだこと、得たこと

私が任される仕事は、今まで経験したことの無いことであったり、自分のキャパシティを超えているものであったりすることが多かったと、今振り返って思います。「出来ないことは出来ないと言った方がいいよ」というアドバイスを大学の先生からいただいたこともありました。しかし結果的には、出来る自信が無くても「私にやらせてください。私なら出来ます」と手を挙げてよかったと考えています。こうすることで次第に大きな仕事を任されるようになりましたし、難しい仕事だからこそ必死に頭を使わなければならず、モチベーションも高まりました。そうして目標を達成することができた後に、自分の成長を感じ取ることが出来ました。

また私はこの6ヶ月間、英語力をはじめ国際情勢、ICTスキル、日本の歴史や政治など、あらゆる側面において知識不足、力不足であることを痛感しました。しかしそれでも、UNのように世界中からやってきた人たちとコミュニケーションをとることは本当に魅力的で楽しいものでした。普段の会話の中に文化や意見の違いが見出せるということは日本ではなかなか起こらないと思います。UNYVをきっかけに、世界で活躍したい、さまざまなことを勉強したいという意欲が強まりました。帰国後はこの経験を活かし、残りあと1年間の学生生活をさらに有意義なものにするつもりです。



東ティモール：青波美智さん

東ティモールに派遣された青波美智（あおなみ・みさと）さんからの現地報告を紹介します。青波さんは、立教大学異文化コミュニケーション学部3年生で、2013年度国連ユースボランティアのYouth and Volunteerism Programme Liaisonとして東ティモールのUN Womenに派遣されました。



(写真)：2013年12月 UN Women オフィスにて。ワークショップの準備が完了し、幸せいっぱいの同僚と共に

東ティモールについて

東ティモールは、インドネシア・バリ島の東方に位置する、四国程大きさのティモール島の東側半分を指します。ポルトガルによる植民地時代の後、24年間に及ぶインドネシアの占領を経て、2002年5月20日に独立しました。日中の気温は年間通して最高30度前後。宗教はほぼカトリックで、トウモロコシやコーヒー豆などの農業が盛んです。ただし国産という概念は希少で、ほぼ全てが輸入品であるため物価は高いです。アジアの国であるにも拘らず挨拶時に両頬へキスをする習慣があり、派遣後最初に驚きました。

東ティモールでの生活

プライベートでは、写真、読書、映画鑑賞、合気道、手芸などを楽しんでいました。年功序列、謙遜、非言語コミュニケーションの多様さなど、東ティモールの文化と日本のそれとでは類似点が多く、期待よりもずっと早くに打ち解けることができました。質の高さを追求しなければ、日本食や韓国料理、イタ

リアンも食べることができます。私の滞在していたディリは首都なので、物資も、これも良質を求めなければの話ですが、充実していたように思います。勿論、家に冷水シャワーしかなかったり、停電断水が勃発したり、買って来た野菜を切ったら中が空洞で芋虫だらけだったり、家中でネズミ・ヤモリ・ゴキブリに遭遇したりと、不便さや不快さの要因を挙げればキリがありませんが。市場やスーパーで買い物済ませた後、ティモール人の友達と小一時間お喋りしてから帰宅なんてことも珍しくありませんでした。

東ティモールでの活動

私の業務は、UN Womenが行っているプログラム運営の補佐です。UN Womenには、女性の平和と安全保障、女性に対する暴力撲滅、女性の政治参加など5つのプログラムが存在します。各プログラムと連携を取りつつ、物資調達から、政府機関に提出する報告書の作成、ウェブサイトへの記事執筆、出版物のデザインなど、幅広い業務を任せて頂きまし

頂きました。ワークショップに参加し、書記を行うことも私の仕事の一環でした。苦労した点は、Communication Liaisonとして、各プログラムの状況を常に把握している必要があったことです。特に派遣後1、2か月目は、どの業務も初めてのことで、頼まれたことをなんとか終わらすことで精一杯でした。ただ魅力は何と言っても、UN Womenのみでなく、他の国連機関や現地のNGO、ティモールの政府機関で働く人々とのやりとりに直に携われること。日々様々な場所で多種多様な人々と出会うことができるため、非常に刺激的です。仕事は基本的に英語ですが、相手が英語話者でない場合、東ティモールの公用語の一つであるテトゥン語の使用を余儀なくされることもありました。年明けに行われた女性の平和と安全保障のワークショップへの参加者30人余りに電話を掛け、テトゥン語で参加確認及びインタビューを行ったことは、一生忘れないと思います。

失敗も沢山してしまいました。Communication Liaisonという肩書にも拘らず、同僚との報告・連絡・相談といういわゆる「ホウレンソウ」を怠った結果書く必要のない報告書を書いてしまったり、各プログラム・オフィサー（PO）から集めた書類の期限を過ぎてしまったりもしました。この点、実際書類の提出を遅れたのは数人のPOだったのですが、提出遅れを未然に防ぐため期限を早めに設定したり、日々リマインドを送り続けたりするなど対処法は存在したため、ただ黙って待っていた私にも非はあったと反省しています。チームで働くのはこういうことだ、と改めて気付かされました。その結果、相手に嫌われるのではないかとというくらい執拗にリマインドを送るようになっていましたが…。

活動を通じて学んだこと、得たこと

業務に関することでは、正確且つ迅速に仕事を終わらせることの大切さです。当たり前なのですが、実際に自分が、しかも言語含む文化背景の異なる人々が集まる組織の中で実行するとすると、予想外に大変でした。国連というとかなり壮大なイメージが湧きますが、その大きな計画を進めるため実際には大量の書類が回っており、ミーティングも少なくありません。また常に複数の職員がチームとなって業務を遂行しているため、例えば何か一つの書類が止まるだけで計画全体が遅れます。従ってUN Womenの一員として周囲に迷惑を掛けることのないよう、与えられた業務をすぐにこなすことが非常に重要だったように思います。

業務に関連すること以外で得られたことは、人生や仕事に対する考え方の変化です。私の上司の言葉を借りると、人生は「Constant learning(常に勉強)」であるということ強く実感しました。国連での職務経験を10年以上持ち、修士課程や博士課程をいくつも取得し、それでいて家庭も持っている彼女ですが、「何も学ばない日は一日たりともない」とのこと。彼女のみでなく、他の同僚も人生における自分の「更新」を心から楽しんでいるようでした。学びたいと思った時に学びたいと思ったことを学び、行きたいと思った時に行きたいと思った所に行ける、それを実行するための計画は怠らない、そんな彼らと出会えただけでも非常に有意義でした。

そういった意味で、今回の国連ユース・ボランティアは人生に置いて非常に大きな糧だったと享受しています。支えて下さった全ての皆様に、心から感謝の気持ちを申し上げます。



ベトナム：小川孝裕さん

ベトナムに派遣された小川孝裕（おわが・たかひろ）さんからの現地報告を紹介します。小川さんは、立教大学の経営学部4年生で、2013年度国連ユース・ボランティアのYouth Volunteering SpecialistとしてUNVベトナム事務所に派遣されました。



(写真)：ダナンのユース・ボランティア団体を訪問した時の様子。活動内容、団体が抱える問題、地域のボランティアリズムの実態を調査。

ベトナムについて

人口は約9000万人（日本の70%）、国土は約33万㎡（日本の90%）と、人口と国土だけを見れば日本に非常に近い数値です。また、南北に細長いという国土の形状も日本に近いものがあります。しかし、平均年齢は27.4歳で、日本の44.7歳と比べるともの凄く対照的です。実際に街を歩いていても若い人が多いです。ベトナム北部は亜熱帯気候で四季があります。ベトナム南部は熱帯モンスーン気候で気温は一年中ほぼ変わらず、雨季、乾季があります。また、南北に長く海に面しているため、港湾も多く物流も簡単です。更には、ベトナム中部の都市ダナンからラオス、タイ、ミャンマーと続く東西回廊という高規格道路の建設も始まっており、東南アジア各国へのアクセスは人、モノともに良好です。

ベトナムでの生活

私は首都のハノイで生活していました。湿度が非常に高く、じめじめとした天気了一年中続く事以外は、

非常に暮らしやすいです。生活面では、困ることは全くないと言っていいほどインフラは整っており、想像していた生活とは違い非常に快適に過ごすことが出来ました。また、ベトナムでは原付バイクが人々の移動の足となっており、道路には溢れんばかりのバイクが走っており混沌としとります。その反面、ハノイから少し外に出ると、田んぼや畑が広がっており非常にゆっくりとした時間が流れており、市内とのコントラストは面白いものです。多くのベトナムの方は初対面の人に警戒心が強く、外国人である私は打ち解けるには少々時間がかかりましたが、仲良くなると家族のように接してくれ5ヶ月経った今では親しい友人が多く出来ました。

ベトナムでの活動

UNVベトナム事務所に着任後は、ユース・ボランティアリング・スペシャリストとして活動しておりました。主な活動内容としては、現在UNVが推し進めているGlobal Youth Volunteering Strategyにべ

トナムのデータを加える事を目的とするベトナムの若者のボランティア活動のマッピング、現地ボランティア団体とのネットワーキング、UNVを通じた広報活動、地元の大学生をターゲットとしたボランティアリズムの啓発、就職スキルを高めるワークショップの企画・運営等、多岐にわたって活動しておりました。若者のボランティア活動のマッピングでは、事務所があるハノイ市以外にも足をのばし、ホーチミン市、ダナン市で活動している計30以上のボランティア団体を訪問し、ベトナムの若者のボランティア活動の実態をデータベースにまとめました。

ボランティアリズムの啓発、就職スキルを高めるワークショップでは、コーディネーターとして企画から実行までを担当しておりますが、現地政府、現地大学、国連ボランティア、他国連機関の職員、NGOと協働し、実施に漕ぎ着けました。UNVの方向性を優先しつつ、全ての関係者が満足出来るように配慮することがとても大変ですが、よりベトナムの若者にボランティアリズムを啓発し開発に貢献してもらうこと、ベトナムの若者に就職に必要なスキルを身につけさせるという共通の目標を持ち力を合わせて奮闘しました。

上記マッピング活動で訪れたボランティア団体の参加も実現させたワークショップでもあり、しっかりとネットワーキングを生かしたワークショップでもあります。結果として、13人の国連ボランティア、10人の学生ボランティアを動員し、参加者は50人以上集め、良い結果を出す事が出来ました。他の国連機関からも評価され、国連ベトナムのホームページでも紹介されました。

活動を通じて学んだこと、得たこと

ベトナムのUNV事務所は、国連機関としては非常に小さく、プログラム・オフィサー、プログラム・アシスタント、私と3人のチームで構成されています。そのため自身の職務以外の仕事にも積極的に取り組み、アドミニストレーション業務からイベントでのスピーチの仕事、国連ボランティア配属先、国連ボランティアの選考との調整等の仕事も任せられ、非常に良い経験が出来ました。アドミニストレーション業務では、他国連機関に配属された国連ボランティアのサポートをする機会が多かったのですが、皆非常に専門性、スキルを持ち、配属先に貢献しておりました。ボランティアというと、責任感が少ない、コミットメントがない、スキルがないという、イメージがベトナムではありましたが、私が接した国連ボランティアは、志が高く、開発セクターのプロフェッショナルであり、配属先の国連機関に大きく貢献していることを痛感しました。

私自身は国連ユース・ボランティアとして派遣されたわけですが、正直、当初は何もスキルが無くどう配属先に貢献出来ればいいのか分からなかったです。どうにか配属先に貢献できるよう積極的に小さな仕事をもらえるようにチームに話をし、自身が身につけるべきスキルを、自分で調べつつ、他職員に教えてもらう等して懸命につけました。その結果、今ではRBM (Result Based Management) を用いたプロジェクトライティング、ホームページの編集方法、UNVの出張報告書、ワークショップ・イベントの企画・実行、UNVのアドミニストレーション業務等が自分一人で出来るスキルを身につけることが出来、新たに配属された国連ボランティアに教えることが出来る程になりました。



ルワンダ：積田和茂さん

ルワンダに派遣された積田和茂（つみた・かずしげ）さんからの現地報告を紹介します。積田さんは、明治大学の政治経済学部4年生で、2013年度国連ユース・ボランティアのYouth Volunteering and Skills Development SpecialistとしてUNV ルワンダに派遣されました。



(写真)：国際ボランティアデーにて、ルワンダに対するUNVの貢献を表彰されたときの記念撮影

ルワンダについて

ルワンダは赤道のわずか南、アフリカのほぼ真ん中に位置する国です。四国の約1.5倍の面積に約1150万人の人が暮らしています。1994年に勃発したジェノサイドの影響で危険な国だというイメージを持たれがちですが、その面影は全く見当たらず、現在ではアフリカの中で最も治安の良い国の1つに挙げられます。経済成長が年率6～8%と好調で、ジェノサイドという悲劇を乗り越えてからの今までの成長を「アフリカの奇跡」と称されています。

ルワンダでの生活

私は首都のキガリに駐在し、国連職員用のUN Houseで生活しています。UNDPのオフィスに近く、スーパーマーケットもあるため、大変立地に恵まれた場所です。また、大統領邸宅がご近所であるため、セキュリティの問題もありません。赤道付近の国ではありますが、高地であるため毎日が初夏のような気温で、雨季であっても雨はそれほど降りません。安全、天候に恵まれて快適な日々を送っています。

ルワンダでの活動

私はUNV ルワンダ事務所に所属し、主に3つの仕事に関わっています。1つは、ルワンダのOne UNのコミュニケーションセクター(UNCG)にて広報活動に従事しています。主にデザインを担当し、今までにバナー、フォルダー、カレンダーなどの制作に携わりました。国連の活動を目に見える形で、政府関係者などに伝えるという役目を担っています。次に、所属先であるUNVにおいて、国際ボランティアデーの企画、運営のサポートに関わりました。2013年度は政府がイベントを主催したのですが、政府とのミーティングに参加し、UNVの協力体制を整える仕事をしました。主に3つのイベントを開催し、そのそれぞれのイベントにおいて、国連ボランティアに参加協力を依頼し、彼らの役割を決めるなどのマネジメントを担当しました。イベント後にはその活動を記事にまとめ、全世界の国連のネットワークに配信しました。国際ボランティアデー以後は、UNVの活動をウェブサイトで発信する広報活動を担当しています。また、ルワンダには若者のボラ

ンティア活動に関わるプログラムの前例がないため、他国の成功例などを調べ、ルワンダの将来のプログラムにボランティアの要素を入れるときに役立てることができるようなレポートを準備しています。3つ目に、国際労働機関（ILO）ルワンダ事務所において、若者の雇用促進プログラムの立ち上げのサポートを行っています。主に、コストの計算や、ドキュメントのレイアウトの修正などを担当しています。様々な機関とのプログラムの話し合いに参加できる機会もあり、プログラム立ち上げのプロセスを学ぶ絶好の機会となっています。その他にも、オフィスに滞在しているだけではなく、フィールドに出て、私の活動の受益者である若者と関わりたいとの想いから、首都キガリにあるユースセンターにおいてルワンダ人の国連ボランティアと共に働く予定です。コミュニケーションセクターでの仕事を通して得たICTスキルを若者に教えることを通して、職業訓練の最前線を体験し、ルワンダが目指しているIT立国に少しでも貢献できればと思います。

活動を通じて学んだこと、得たこと

ルワンダで働く国連職員、国連ボランティアには様々な国籍の人が集まっています。英語で業務を行うのですが、ネイティブスピーカーの方がかえて少なく、全ての人がマイノリティであり、それぞれが全く異なるバックグラウンドを有しています。このような多様性を持つ環境での仕事を通して、自分が合わせることでより円滑に物事が進むことを体感し、相手に応じて、自分の態度を柔軟に変化させる能力を身につけました。また、発展途上国という決して快適ではない生活を通して、タフな心身になると共に、異なった生活スタイルに自分自身を合わせ、日本にいる以上に生活を楽しむことができるような

生活を楽しむことができるような適応力を磨きました。また、これらのような力以外にも、国際協力の中における国連の役割を身を持って学び取りました。ここで働く機会を得る前は、政府や国連が実施する広い分野に渡るプログラムの意義を見いだせずにいました。それらのプログラムは貧困削減、雇用の創出、教育機会の提供など発展途上国が成長を果たす上で当然必要なことが述べられ、理想を書いているにすぎないものだとの疑問を抱いていたからです。しかし、若者の雇用促進プログラムの立ち上げに関わっているときに、政府と国連が作り上げたルワンダの発展に関する大きな枠組みであるプログラムの重要性を知ることができました。雇用促進プログラムの活動は政府と国連が掲げる発展目標の大きな枠組みに照らし合わせて作られていたからです。例えば、大きな枠組みのプログラムに若者の雇用機会を10%増やすとあれば、それを達成するためにどのような活動を実施すればいいのかをより小さい枠組みのプログラムにおいて検討します。雇用だけではなく、大枠に照らし合わせたプログラムを数多く作りあげることで長期において開発目標を達成できるのだと学びました。それに加えて、国連が作成したこのようなプログラムに応じて、パートナーである各種団体はファンドを得ることができ、プログラムに即した活動を繰り広げることができます。このような国連のコーディネーターとしての欠かせない役割を知れたことが、今後私が国際協力に従事するのであれば、進むべき道を指し示す役割を果たしてくれることでしょう。これらのような学びは国連ボランティアとしてルワンダに派遣していただくことがなければ決して得ることができなかったものであり、大学生である最も若いうちに国連で働ける経験を積むができて大変ありがたく思っています。



フィジー：小川千春さん

フィジーに派遣された小川千春（おわが・ちはる）さんからの現地報告を紹介します。小川さんは、東洋大学の国際地域学部3年生で、2013年度国連ユースボランティアのCommunication and Knowledge Managementの担当としてUNV フィジー事務所に派遣されました。



(写真)：International Volunteer Day にて。

フィジーについて

フィジーは300以上の島々からなる南太平洋の島国で、一番大きなビチレブ島の東部に首都のスバ、西部に国際空港があるナンディが位置します。1970年にイギリスから独立、人口は約87万人、面積は四国とほぼ同じ大きさです。フィジー系とインド系が約半々で、フィジー系のほぼ100%はキリスト教徒です。使用言語は英語・フィジー語・ヒンドゥー語。フィジー人はとてもフレンドリーで、のんびりとした国風です。

フィジーでの生活

UNDP/UNV Fiji Multi Country Officeはフィジーの首都スバにあります。スバの街にはフィジー最大のマーケットに加え、いくつかの大型ショッピング・モールがあるので生活用品のほとんどがそろう便利な街です。

娯楽は映画やスポーツ。国技に相当するラグビーは大人気で、テレビの放送があると皆家から離れませ

ん。海外では水に気を付けなければならない場面が多いですが、Fiji Waterで有名なフィジーでは、水道水も飲むことができます。フィジー系のほぼ100%がキリスト教徒というだけあって、毎週日曜日は街が静まりかえり、教会からきれいな合唱が聞こえてきます。

フィジーでの活動

私は国連ユース・ボランティアとしてUNV フィジー事務所に所属し、広報やデータ管理業務に従事しています。着任後すぐに、MDGsとPost 2015に関するブックレットの作成に全面的に携わりました。これは、太平洋諸国に派遣されている国連ボランティアにそれぞれが行っているプロジェクト等について記事を書いてもらい、UNV フィジー事務所がそれを添削・編集・発行するという業務です。

私の任務は、提出が遅れている人には催促メールを送るといった全体の進行管理、そして送られてくる記事の添削・編集でした。この業務を行う上で、各

執筆者の進行状況がわかるようエクセルで進行状況シートを作成し、常に最新の情報を更新し共有ドライブにアップロードする仕組みを作成しました。このシートは上司からの評判もよく、業務の円滑化につながりました。

ブックレット作成以外にも、国際ボランティアデーに向け Facebook ページとボランティア・マガジンの作成を行いました。Facebook ページ作成にあたり、規約などを必要とする国連の基準と、スピードを求める現地ボランティア団体のスタッフの基準が異なり、上司と現地スタッフの板挟みになり戸惑うこともありました。

現地ボランティア団体のスタッフの意向とは異なったものの、大人数で運営する上での規約の必要性などを説明し、結果的には規約や写真の選定基準なども受け入れてもらうことができ、参考にしてくれた時は嬉しかったです。

他にも太平洋諸国にちらばる国連ボランティアのリスト作成や、UNV のデータ管理などを行いました。また、パシフィック・ニュースレターの発行にも従事しています。

活動を通じて学んだこと、得たこと

私がこの国連ユース・ボランティアを通じて得たことは、国籍もバックグラウンドも年齢も違う人々と活動をする上での、コミュニケーションを取る力です。上司はもちろん、ブックレットを作成する上で執筆に協力してくれた国連ボランティア達も、様々なバックグラウンドを持ちます。とりわけメール上だけでやりとりする人々とのコミュニケーションに

最初は苦労しましたが、何度もやりとりをするうちに書き方を変えるだけでも相手の意欲につながるということがわかりました。「これが日本だったらもっとスムーズに進んでいたのではないか」と思うことも何度もありました。

ですが、国が違えば環境が変わることは当たり前で、今自分がいる環境で自分ができる最大限の工夫を凝らして業務を進めました。そうすることで周りからの信頼も増え、一番年下で一介の大学生にすぎない私ですが、徐々に頼りにされるようになり、任される仕事も多くなりました。

もちろん、自分の英語力の未熟さや技術の甘さを実感することもありました。しかしそれを着任後にあれこれと考えすぎるのも良くないと思い、自分に足りないと感じたことは帰国後の課題としてたくさん持ち帰ることに決め、上司たちから学びながら、自分ができる 120% で業務に当たりました。こうして業務を遂行し達成した時の喜びは、何ものにも代えがたい喜びでした。

国連ではこういった考え方を要求され、どう動けばいいのか。そして自分はその中でどのような役割を果たすことができるのか。この国連ユース・ボランティアを通し、その一角ですが学ぶことが出来ました。

今回の経験を活かし、自分なりの形で世界へ貢献できる人間になれるよう、帰国後は専門性の強化や自分に足りない力を得るため、さらに学業に励みたいと思います。



ボスニア・ヘルツェゴビナ：松浦果穂さん

ボスニア・ヘルツェゴビナに派遣された松浦果穂（まつうら・かほ）さんからの現地報告を紹介します。松浦さんは、関西学院大学の総合政策学部 2 年生で、2013 年 9 月に Youth Volunteering Specialist として UNDP ボスニア・ヘルツェゴビナ事務所に派遣されました。



(写真)：International Volunteer Day（12 月 5 日）にボスニア・ヘルツェゴビナで活動する国連ボランティアたちと共に

ボスニア・ヘルツェゴビナについて

ボスニア・ヘルツェゴビナは東欧、バルカン半島に位置する日本の 3 分の 1 くらいの大きさの国です。1992 年にユーゴスラビアから独立を宣言し、すぐに激しい民族紛争が勃発しました。

紛争は 1995 年に終わりましたが、20 年たった今でも街に戦争の傷跡が深く残っているだけでなく、人々の間にも紛争の影響をうかがえる面が多くあります。

また、国は民族による住み分けがされていて、実質上二分割されている状態です。中進国ではありますが、民族間の溝は深く、それにより政治のシステムが複雑で政府が機能していません。また若者の失業率が高い国です。

ボスニア・ヘルツェゴビナでの生活

私はボスニア・ヘルツェゴビナの首都サラエボで生活をしています。サラエボは第一次世界大戦が始

まった地、そして 1984 年のサラエボ・オリンピックで有名な場所です。首都と言ってもあまり大きな街ではなく、中心部は 1 時間も歩けば一周してしまえるような大きさです。オスマン帝国時代のトルコ風の街並みや、ハンガリー・オーストリア王国時代の西洋風の街並み、そして紛争の弾痕がのこっている街並みがあります。

電気やガスなどは安定して、食べ物もおいしいのでとても住みやすいです。サラエボに住む人々の大半はボスニアック（ムスリム人）のため街の至る所にモスクがあり、朝からよるまでコーランの読まれる声が鳴り響いています。

ボスニア・ヘルツェゴビナでの活動

私は、国連ボランティア計画（UNV）のオフィスで働いています。私の主な活動内容は、UNV やボランティアのプロモーションとイベントの補佐です。プロモーションでは、新しいバナーをデザイナーと連絡を取りながら制作したり、イベントの際に UNV

をプロモーションするためのUNVグッズや冊子を作成・デザイン・発行したりしました。また、地元のボランティアを取材しボランティアの声を紹介するボランティア・マガジンを発行しました。

イベントの補佐では主にワークショップを運営する手伝いや、国際ボランティア・デーの企画・準備・運営に関わりました。

その他、ユースの人々を中心にするボランティア組織を作り、ボランティアを求めている団体とユースを繋げるネットワーク作り、また、自らも特別支援学校や、就学前の子供を対象とする教育施設でボランティア活動を行っています。

活動を通じて学んだこと、得たこと

国連で働くということは常に中立であらねばならないこと、国連として統一していることから外れてはならないことを常に考えなければなりませんでした。

ボスニア・ヘルツェゴビナは主にボスニアック・クロアーツ・セルビアックの3つの民族が住んでいて、民族間の対立が紛争をもたらしたのにも関わらず、民族間の溝は深いまま、今でも3つの民族は1つの国に住んでいます。

当然3つの民族に対する支援は中立でなければならず、私も仕事をするうえで常にこのことを頭の片隅に置いておかなければなりませんでした。

プロモーションで何かを発行する際、たとえそれがどんなに短い記事でもその記事が「中立」であるか

否かを考えなければなりません。

ナショナルスタッフや国連の広報を担当するUNDPのコミュニケーションチームの職員に何度も確認してもらわなければならず、国の情勢の複雑さを学びました。

さらに国連としての統制をとらなければいけないことから、自分の行動は国連としての行動として見られていることを学び、常に意識して行動しました。インタビューをしたのに記事を発行できなかったり、何週間もかけて仕事していたことが完成間近であきあきらめざるをえないこともあったりしました。

また、国際ボランティア・デーのイベントの際にはそれまで立てていた計画から、UNVのメンバーを2チームに分けて別々でイベントを行うという計画に直前で変更し、いろいろと準備が大変でしたがその分終わった後の達成感も大きいものでした。

また、ボランティア活動をしながら出会った人々にいろいろなお話を伺う中で自分の将来のキャリアを考えるよいきっかけにもなり、世界が広がったような気がします。

ここで経験したことはすごく貴重なものだと思います。ここまでこられたのも、大学の先生方や職員の皆様、そして家族をはじめとする多くの人々に支えられてからこそだと思います。帰国してからも常にになにかにチャレンジし続ける人でありたいと考えています。



エチオピア：西縁さん

エチオピアに派遣された西縁（にし・ゆかり）さんからの現地報告を紹介します。西さんは、上智大学の大学生で、2013年度国連ユースボランティアの Support to Climate Change Associate として UNDP エチオピアに派遣されました。



(写真)：UNV の国際ボランティアデーにて地元のボランティアたちと

エチオピアについて

エチオピアはアフリカ大陸の北東いわゆる「アフリカの角」に位置するアフリカ最古の国です。人口は約 9100 万人で大きさは日本の面積の約 3 倍です。過去に 5 年ほどの占領を除き植民地化されたことのないというアフリカの中では珍しい国です。

その為この国には多くの独特の文化が今でも色濃く根付いており、80 を超える民族それぞれの文化や伝統が各地に残っている神秘的国とも言われています。また、アフリカ連合の本部が置かれるなどアフリカ全体でも重要な位置を占めている国です。

エチオピアでの生活

エチオピアは世界でも最貧国の中の一つですが、私の住んでいる首都のアディアベバは急速に都市開発がすすめられていて、海外製品も手に入れることができます。町中で工事が行われており、大きなビルも建ちはじめています。中でも A U 本部のビルはひととき目立っています。

しかしその一方で一步中道に入るとトタン屋根の家に住んでいる方がたくさんおり、貧富の差が大きく広がっていると感じます。また首都を出ると今でも土の壁から作った家に住んでいる人が多く、アディアベバと雰囲気は全く異なります。

人々はアフリカ人と聞いてイメージするような陽気さはあまりありませんが、打ち解けると伝統的なエチオピアの音楽を聴くと踊りだすような愛国心にあふれた人がたくさんいます。

エチオピアでの活動

私は、UNDP の GEF-SGP（環境ファシリティ、スモールグラントプログラム）事務所でコミュニティ、NGO 主導で地域の環境課題の改善プロジェクトのプロポーザルをまとめ、情報共有の為のプロファイリングなどを行っています。

エチオピアでの活動

私は、UNDP の GEF-SGP（環境ファシリティ、ス

モールグランツプログラム) 事務所でコミュニティ、NGO 主導で地域の環境課題の改善プロジェクトのプロポーザルをまとめ、情報共有の為にプロファイリングなどを行っています。

SGP は地元の環境問題に取り組んでいる NGO や地域団体に主に資金や技術的な支援を行っています。

小単位のプロジェクトが様々な地域で同時に進行しているため情報の共有が何よりも重要になります。

私はそのもっとも重要なナレッジマネジメントの分野でより今までに SGP が取り組んだプロジェクトをわかりやすくまとめ、同様のプロジェクトに取り組もうとしているほかの地域の団体や他国の SGP 事務所がこれから行うプロジェクトのために参照できるようなプロファイリングを行っています。

活動を通じて学んだこと、得たこと

エチオピアは文化が独特であり、ほかの国とは全く違った風習が生活の様々なところに根付おり、日々の生活の中で学ぶことはたくさんあります。仕事の面においてはプロジェクトレポートを読みまとめる機会が多いため、書類の要点をまとめる力は派遣前に比べ力がつけられたと思います。

そして何よりメンタル面（仕事のセルフマネジメント、まったく異なる文化の人がたくさんいる中で仕事、生活をする）ことで度胸もついたと思います。

自分の力不足を感じる場面もありますが、新しいことに出会うたびに調べ、人から学び吸収できるこの刺激的な環境は国連ならではの、努力をすれば自分の可能性はいくらでも広がるということを知ることができたと思います。





UNV CONTACT

United Nations Volunteers (UNV)

Postfach 260 111, D-53153 Bonn, Germany

Telephone: (+49 228) 815 2000

Fax: (+40 228) 815 2001

Email: information@unvolunteers.org

Internet : www.unvolunteers.org

UNV Facebook page: www.facebook.com/unvolunteers

UNV Tokyo Liaison Office

5- 53-70, Jingumae, Shibuya-ku, Tokyo, Japan 150-8925

Telephone: (+81) 3-5467-7815

Fax: (+81) 3-5467-4878

Internet : <http://unv.or.jp>

UNV Facebook page: <https://www.facebook.com/pages/UNV-Tokyo/410937692302244?fref=ts>



UN

Volunteers

inspiration in action